

## ギンリョウソウとアキノギンリョウソウ

「森を食べる植物」という表題の本が、今年岩波書店から出版された。「ええっ！」と驚いたが、副題として「腐生植物の知られざる世界」とあったので、興味深く読み始めた。

腐生植物というのは「緑の葉を持たず、光合成をしない代わりに、カビやキノコを食べて暮らす植物」(同書)の事であり、そのカビやキノコなど菌類も自ら栄養を造りだすわけではなく、植物が造る栄養で生活している。従って腐生植物は菌類を介して間接的に植物＝森を食べていることになる、というわけである。

では腐生植物は「森の厄介者」なのだろうか。著者は、腐生植物が生きていくためには「森が豊かで、植物と菌類の間に、ゆとりのある安定的な関係が築かれていなければならない」と言い、腐生植物は「豊かな森の象徴」とも言える存在だとしている。

不思議な生態をもつ腐生植物の探し方なども詳しく書かれてあり、腐生植物に対する著者の愛情をも感じさせる一冊となっている。

よく知られている腐生植物は**ギンリョウソウ(銀竜草)**で、二上山でも出るし、今年7月登った北岳の2000mに近い樹林帯でも多く見かけた。茎も葉も花も真っ白で、緑の部分はどこにもない。進

### ↓アキノギンリョウソウ(昨年9月二上山で)

↑**ギンリョウソウ(今年5月二上山で)**

化の過程で光合成の機能も機能も捨ててしまって、全面的に他者(菌類)に依存する植物になりきったのだろう。

本書によると、種子は微細で、発芽に必要な栄養までも菌類から奪うのだそうだ。徹底した省エネスタイルを貫いている。

**アキノギンリョウソウ**は 一昨年、昨年と二上山の雑木林で姿を見せた。姿かたちがギンリョウソウにそっくりで別名ギンリョウソウモドキ。私は子供時代から長い間、この二つは同種と思っていた。

ギンリョウソウが初夏から夏に、アキノギンリョウソウが9月以降と、出現する季節で見分ける、と習ったが、花の中を覗くと柱頭(雌しべの先端)がギンリョウソウではブルー、アキノギンリョウソウで



↑ギンリョウソウ(今年5月二上山で)



は淡い褐色だった。上記の本ではアキノギンリョウソウの柱頭は白としており、巻末で紹介している台湾産の腐生植物(ギンリョウソウに酷似)の柱頭は黄色としている。来年秋、ルーペでよく観察することにしよう。

分類上では、ギンリョウソウもアキノギンリョウソウも従来はイチヤクソウ科に入れられていたが、最近、共にツツジ科に移され、前者はギンリョウソウ属に、後者はシャクジョウソウ属にと分けられていて、別属別種とされている。

### 懐かしかった「開聞岳と寒干し大根」(巻頭写真) 「いつでも元気」12月号を読んで

開聞岳(100名山)に初めて登ったのは正月でした。指宿温泉からの沿道には菜の花が満開、そしてこの寒干し大根が白壁のように散在し、背後の開聞岳を際立たせていました。忘れられぬ風景です。

12月号には奈良市の平和会健康友の会の「スマイルランチで居場所づくり」の記事(12P)、秋田・栗駒山山麓の記事(25P)、そして登山映画「メルー」の紹介(33P)等々、読みどころ満載です。

「いつでも元気」は友の会の全国的月刊グラビア誌、「いのちは平等、医療に格差無し」の各地の取り組みが分かります。月380円です。あなたも是非お読みください。連絡は松尾まで。

### 続・二上山に咲く花々 ⑩

#### ノコンギク(野紺菊)

#### キク科シオン属

写真 澤木仁さん

いわゆる「野菊」と呼ばれる野生ギクの一つ。登山道の路傍に群を作って沢山の花を咲かせます。周囲に伸びる舌状花は淡紫色、中央に丸く固まる管状花は黄色、合わせて直径2.5cm位の大きさです。この種の園芸種で濃紺の物を「紺菊」と言い、その野生種の意味での名前。伊藤左千夫の小説「野菊の墓」の菊はこの花の事だとの説があります。近縁種で食用とされる「ヨメナ・嫁菜」とよく似ています。



### 続・二上山に咲く花々 ⑪

#### ヤマハッカ(山薄荷)

#### シソ科 ヤマハッカ属

写真は澤木仁さん

10月ごろから、岩屋峠の崖側に花をひろげ始めますが、寒風が吹き始める頃になっても咲き続けます。シソ科特有の四角い茎ですが、長い花穂に青紫色の小さい花を数個ずつ数段に分けてつけ、その花が一度に開かず、リレーしてゆくので、花期が長いのです。同じシソ科のハッカに似るので、この名をつけられたのですが、ハッカのような芳香は有りません。

